

## 活動報告書

報告者氏名：長谷 紗希

所属：青森県立浪岡養護学校

記録日：2013年2月12日

### 【対象生徒の情報】

・学年

中学部2年 女子1名

・障害名

成長ホルモン分泌不全性低身長、知的障害

・障害と困難の内容

発語がない。口蓋裂術後で、発声はあるが発語は難しい。自分なりのジェスチャーでコミュニケーションをとろうとしているが、関わりが少ない人にとっては意味がわかりにくく、コミュニケーションの妨げとなっている。

### 【活動目的】

・当初のねらい

対象生徒は、コミュニケーション手段として、ジェスチャーを使っていたが、上手く伝わらないことが多かった。特に、困っている場面や何をすればいいかわからない場面では、周囲からの働きかけを待ち続けた。人を見つめていたりするが、その他に生徒から働きかけることはなかった。そこで、多くの相手に伝わりやすいツール (iPod touch) を使用し、相手に伝わる経験を積み重ねることによって、本生徒が苦手としている要求の伝達がスムーズにできるようになることを目指した。

・実施期間

2012年7月～

・実施者

長谷紗希 (特別支援学校教諭)

・実施者と対象生徒の関係

学級担任

## 【活動内容と対象生徒の変化】

### ・対象生徒の事前の状況

困っている場面や何をすればいいかわからない場面では、周囲からの働きかけを待ち続けたり、人を見つめていたりするが、その他に生徒から働きかけることはなかった。

### ・活動の具体的内容

アプリケーション「Drop Talk」を活用した。このアプリケーションは対象生徒にとって操作が簡単である。また、生徒の生活に合わせて、シンボルを容易にふやすことができるためである。

自立活動（週2回）では、必要なシンボルを探し、「テグス ください」と2語文で要求することを目標にしながら、ビーズのプレスレットを作った。実施者に要求できるようになったので、要求する相手を、実施者以外に拡大した。

また、音声で要求をする機会を増やすため、本人がジェスチャーで依頼した場合は、iPod touch で依頼することを促したり、正しい操作の仕方を教えたりした。その上で、iPod touch で依頼できたら要求に応えることにした。

### ・対象生徒の事後の変化

ジェスチャーだけに頼るのではなく、シンボルを押して音声で要求する場面が増えた。自立活動以外の授業でも、はさみがないことに気づき、指導者に要求することがあった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・報告者の主観的気づき

実践前は、要求できる相手が限られていたが、実践を通して、要求する相手が拡大し、話しかけるまでにかかる時間も短縮したように感じた。探している人物やものが見つからないとき、近くを通りかかった人や最寄りの部屋にいた人があまり話しかけたことのない相手でも、「□□先生」「白 ビーズ ください」などと話しかけていた。

要求以外の活用として、昼食の時間にシンボルを押し、友達との会話を楽しんでいた。また、カメラ機能で撮った写真を学校や家で見せ、それぞれのできごとを伝えようとしていた。写真だけでうまく伝わらない場合は、アプリケーション「Drop Talk」「かなトーク」で写真に写っている人の名前などの情報を補っていた。

### ・エビデンス

【表1 実施者以外に話しかけるのにかかる時間】

	実践以前	10月	12月
A	話しかけない	8分	10秒

### ・その他エピソード

要求に限らず、対象生徒の伝えようとする意欲が高まってきている。これからはよりスムーズに伝達できるように、iPod touch で伝えるものとそれ以外の伝達手段が有効なものを検討したり、シンボルを精選したり、発声で呼び止めてから話しかけるなどのより良い話しかけ方を習得したりすることを目指したい。

また、本生徒は周囲に言われるまで iPod touch を使わないことがある。今後は本生徒が iPod touch を使いやすい条件を見つけ、指導に生かし、自主的に iPod touch を使う場面を増やしていきたい。